

追悼する、記憶する、将来のために学ぶ：震災をテーマにした  
 ダークツーリズム

---

CAROLIN FUNCK  
 HIROSHIMA UNIVERSITY GRADUATE  
 SCHOOL OF INTEGRATED ARTS AND  
 SCIENCES

### ダークツーリズムの概要

ダークツーリズム：  
 ・死、災害、残虐行為などを対象にした観光行動  
 ・人間の暗い側面に関連する  
 ・新しい現象ではない：戦場や墓への訪問が昔からある

→ なぜ、今注目を浴びるようになった？

### 研究の発展と視点

- 主な研究業績 1995-2000:
  - Dissonant Heritage (Tunbridge/Ashworth 1996)
  - Thanatourism (Seaton 1996)
  - Dark Tourism (Lennon/ Foley 2000)
- 背景その 1: "heritage" (遺産)を巡る研究論
- 背景その 2: 冷戦の終わり
  - Auschwitzなど東ヨーロッパの負の遺産が注目を浴びる (Hartmann 2012)

### 研究の発展と視点

- 背景その 3: ポストモダン時代の現象:
  - グローバル情報技術の普及
  - 開発指向が強い近代的思想への不安
  - 教育と商品化の要素が混合すること(edutainment)を条件として発展している(Lennon/Foley 2000)
- 対象となる遺産の保護と解釈について論争を起こす危険性が高い: dissonant heritage, difficult heritage (Foote 2003, Hartmann 2012) → 話題性が高い

→ 「ダークツーリズム」が流行る

### 研究の視点：分類

- 「暗さ」の程度による分類：薄いから暗いまで
- 観光資源の特徴(供給)による分類(Stone 2006):
  - 内容 (教育 ↔ 娯楽)
  - 場所の真正性
  - 時間的距離
  - 歴史に対する発想(保護 ↔ 商品化)
  - 観光インフラの整備
  - 解釈の真正性
  - 政治的影響やイデオロギー
- 需要による分類(Seaton 1996): 訪問動機、個人的な関心 ↔ 一般的な関心
- 需要と供給の組み合わせによる分類(Sharpley 2009)

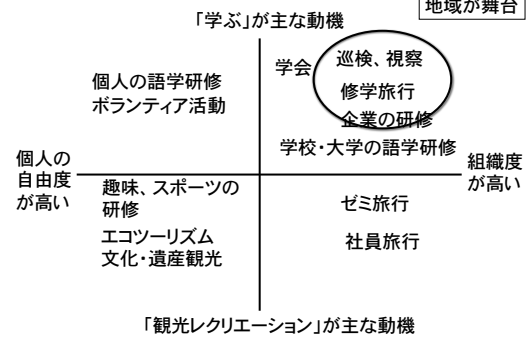
### 最近の研究動向

著書	場所	内容	結論
Sought experiences at (dark) heritage sites (2011)	Auschwitz (ポーランド)	観光者の動機と経験を分析	多様な動機を確認；歴史を知りたい動機が強い
Benefits of visiting a 'dark tourism' site: The case of the Jeju April 3rd Peace Park, Korea (2011)	Jeju (韓国)	観光者の動機と経験を分析	観光者の動機(学びたい、好奇心、恩義)によって経験が異なる
Responding to Disaster: Thai and Scandinavian Tourists' Motivation to Visit Phuket, Thailand (2008)	Phuket (タイ)	観光者の動機(国内観光者と外国人旅行者)	国内観光者：復興に関する好奇心、助けたい；外国人旅行者：リゾート；若い人：震災そのものに興味
Investigating the motivation-experience relationship in a dark tourism space: A case study of the Beichuan earthquake relics, China (2016)	Sichuan (中国)	Sichuan訪問者の動機と経験を分析 → 訪問者へ注目	動機(教育、好奇心、レジャー、感動)と経験(知的、教育、倫理、個人的)の関係を明らかにした

## ダークツーリズムの教育的側面： 「学ぶ観光」

- Educational Tourism → 教育的観光
- しかし：観光者から考えた場合：学ぶ観光
- 定義：tourist activity undertaken by those for whom education and learning is a primary or secondary part of their trip (Ritchie 2003:18)
- → 教育・学ぶことは旅行の一部である

## 学ぶ観光の分類



## ダーク・ツーリズムとしての自然災害地観光

### 悲劇としての特徴

- 「被害者」は存在するが、「加害者」はいない → 「解釈」についての論争が起こりにくい
- しかし
- 場所や社会層により震災の影響が異なっている
- 記憶も異なる
- 解釈も異なるはず

### 研究の焦点

- 対象：2008中国Sichuan地震、2005年Hurricane Katrina、2004年インド洋大津波など
- 観光地としての魅力を取り戻す過程
- 訪問者の知的と感情的経験
- 教育、アイデンティティ構築としての利用
- 記念施設のあり方

## 日本の自然災害

- 頻度と種類が多い
- 悲劇を早く乗り換え、復興にかかることが重視されている
- 観光の対象は「悲劇」から「復興」に移る
- 助け合いや災害を乗り越える動力という側面が強調される
- 自然災害でも、町の構造、開発の方法と歴史、行政組織などが震災の影響を左右させる
- 解釈が異なる(はず)

## 日本のダーク・ツーリズムの象徴：広島

### 建物

- 原爆ドーム：1960年代に激しい議論が展開される：記憶のシンボルとして保存するか、忘れたい悲劇のシンボルとして壊すか
- 1980年代から：保存と世界遺産登録に幅広い支援

### 語り

- 1960年代：被爆者であることを公表しない
- 1980年代：被爆者団体から「語り部」が生まれる
- 語り部：個人の経験、被爆の個人差を重視 → 公式解釈と異なる (Yoneyama1999)

→ 「追悼する」、「記憶する」、「記憶を伝える」、「将来のために学ぶ」という観光形態が生まれる

## 日本のダーク・ツーリズムの象徴：広島

しかし：その他の被爆建物：解体、再利用、または放棄 → 記憶に繋がらない

→ シンボルを保存するだけで十分？



↑ 広島大学理学部：空き家のままで放棄

← 広島赤十字病院：2013年立て替え；メモリアル設置

## 太平洋戦争の遺産を訪れる観光

- 遺産は東南アジア、中国、南洋群島、ハワイ、旧ソ連などに分散している
  - 墓、戦場、捕虜収容所、築城、軍隊の備品など
  - 訪問者は元兵士（ヴェテラン）とその遺族が中心だが、若い人も訪れる
  - 日本人と当時対決した他国からの訪問者が同じ場所を訪れる
  - 受け入れ地域は日本からの訪問者を受け入れないことも多い
- あまり把握されていない観光形態である

## 公害

- 水俣病：同じ行政地域内に加害者と被害者がいる → 外部に対する説明が難しい
- 1993年：水俣市立水俣病資料館開館
- 1994年：水俣病犠牲者慰霊式で水俣市長が反省の意を述べる；語り部制度が始まる
- 相思社とNPO法人水俣教育旅行プランニングが教育観光を実施（2008年：年間～5000人を案内）



## ダークサイトの再解釈

- 毒ガスの島  
→ ウサギの島
- 労働紛争、爆発、鉱山の事故、銅精錬による汚染、強制労働  
→ 産業化、近代化の実績



## 東日本大震災

- 片付ける過程で多くの被害証拠が消える
  - 多くのボランティアや旅行者が訪れる → 見せる場所、説明できる場所が必要
  - 津波の記憶を残す必要がある
  - 一方、とにかく「忘れない」人も多い
- なにをどのように残すか？



福島の特徴：

- 「近代的発想への不安」の代表的サイト
- 加害者はいるが、政治的な理由で加害者として位置付けられていない
- 訪問は危険性を伴う

## 阪神淡路大震災をテーマにした観光

研究目的：

- 震災を記憶する場所や形態、記憶を担う主体、伝達する方法
  - 震災の記憶を伝える主体と場所による内容や方法の違い
  - 震災観光の課題
  - ダーク・ツーリズムとしての側面
- を阪神淡路大震災の事例(神戸市を中心に)から明らかにする。

方法：

- 記念モニュメント、場所、震災に関する展示の内容分析
- 記念施設、または震災ツアーや修学旅行を実施する組織の聞き取り調査
- 震災観光の主体、場所と内容を分析

## 神戸市の都市計画：2つの側面

大規模開発

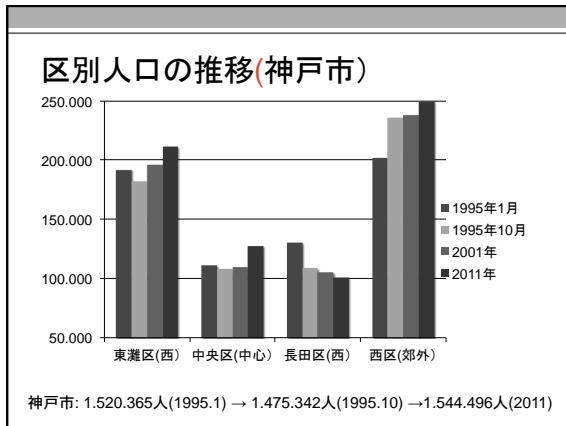
- 「山が海へ行く」：山間地域の団地開発と人工島の開発
- 神戸空港
- 東西の副都心開発計画

→ 「神戸株式会社」

市民によるまちづくり

- 真野地区(長田区)など、環境改善を目指したまちづくりが有名(1970年代から)
- 地区計画を決める地区もある
- 市のまちづくり条例(1981)により市民活動を支援

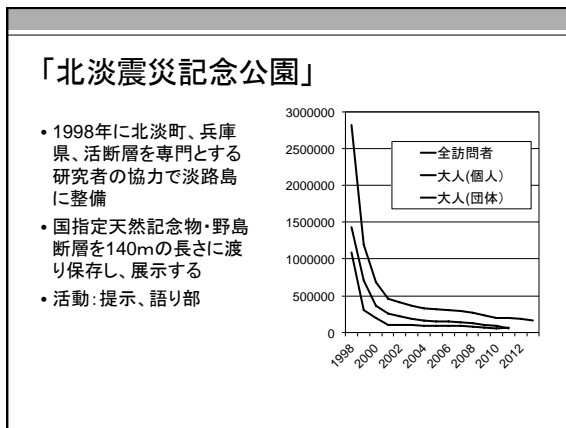
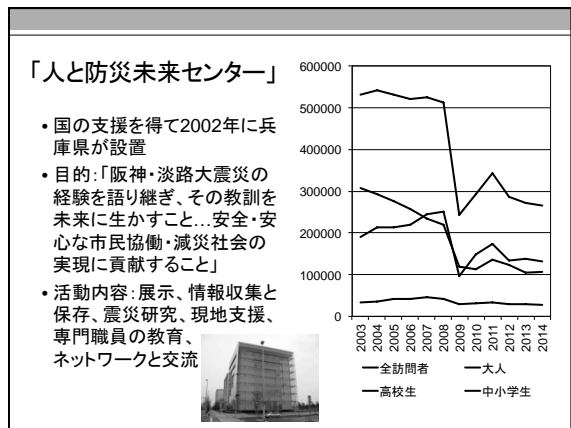
→ 大規模開発型都市政策と市民まちづくり運動の両立と対立が混じり合い、地区によって復興過程が異なる結果をもたらした



- ### 市民参加
- だれが記憶するか
- |   |   |
|---|---|
| <p>市民活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>救出、消防</li> <li>避難場所の運営</li> <li>まちづくり協議会の設置</li> <li>市民間の意見調整</li> <li>行政との交渉</li> <li>計画づくり、ワークショップの実施</li> </ul> <p>なにを記憶するか</p> | <p>市民団体の種類</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>伝統的自治会</li> <li>まちづくり協議会(都市計画法に基づく)</li> <li>ボランティア団体、まちづくり団体</li> <li>NPO(1998以降)</li> <li>専門家団体(建築家など)</li> </ul> |
|---|---|

### 公式震災関連施設

- 「慰霊と復興のモニュメント」と「1.17希望の灯り」
- 神戸市役所に隣接
- 慰霊 → 復興 → 希望



- ### 両施設の役割
- |   |   |
|---|---|
| <p>人と防災未来センター</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>国・県の開発事業 → 公式位置づけが強い</li> <li>施設内の研究者による活動</li> <li>ボランティア団体による支援(2014年: 142人; 減少傾向)</li> <li>展示技術の専門スタッフがいない → 外部委託 → 修学旅行など教育観光の対象として位置づけ</li> </ul> | <p>北淡震災記念公園</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>淡路島北西部の唯一観光施設</li> <li>科学的裏付け</li> <li>地域からの支援: 語り部(2012年: ~20人)</li> <li>アクセスが不便、高速料金が高い</li> <li>展示技術専門スタッフがいない → 訪問者確保が難しい</li> </ul> |
|---|---|

## 地域の記憶: 場所

関西震災モニュメントマップ  
(2001) : 158ヶ所が記載; 長  
田区19ヶ所、東灘区20ヶ所  
= 被害が大きかった区



「死」の  
地図



記念プレート:  
この公園は  
市民によって  
計画された



被災  
電柱:  
震災の  
証人

## 一つの公園に 震災のすべて

長田区大園公園: 火災の  
広がりを止めた場所として  
有名  
野田北部地区: 震災前か  
らまちづくりが有名



事実を知る: 震災の画像  
被害者を追悼する:  
お地藏さん  
復興を知る:  
地区計画の説明  
町を考える: 『美しいまち  
宣言』の看板

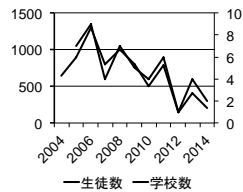


## 地域の記憶: 体験その1

NPO まちづくり研究所  
(まちけん)

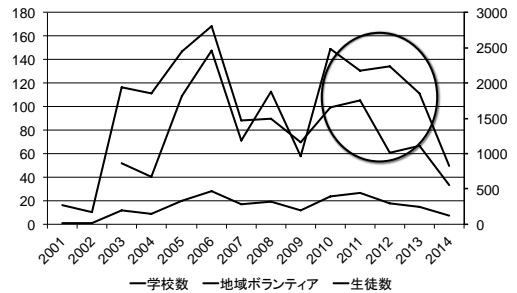
- テーマ: 「町の災害の記憶を「探検」し、市民の強さを「発見」し、みなさんの町を「ほっとけん」ようになる
- ガイド: 専門家(都市計画)、地域住民
- 1日1人当たり3240円
- 午前: 炊き出し体験
- 午後: 10地区における29コースから選択、そのうち24コースが語り部を含める;
- テーマ: 震災体験14、福祉6、地場産業(7)、その他(2)

体験参加学校数と生徒数



学校以外、年に1-200人の研究者訪問、  
研修や調査訪問を受け入れている

## 体験その2: NPOまちづくりコミュニケーション (まちコミ)



学校以外、年に10-20回の研究者訪問、研修や調査訪問を受け入れている

## まちコミの活動と課題

- 長田区御蔵地区のボランティア団体、2012年からNPO
- 2001年から修学旅行の受け入れ
- テーマ: 語り部の生の声を聞き、現地を歩き、今の生活を見直し、自分に何ができるのかを考える
- ガイド: NPOスタッフと地域ボランティア
- 2時間1人1080円
- 内容: スライドと語り部への質問、町歩き、炊き出し体験
- 語り部: 2ヶ月に1回研修を行う
- メッセージ: 震災の教訓は自分たちのまちは自分たちで守るしかない。そのために日頃からの人の繋がりが重要である。
- 課題: 学校の数が多く、ボランティアが不足している
- 課題(語り部): 完全に再建された町で、どのように当時の状況を実感させるか
- 効果: 子供たちが当時の現状を想像できるようになり、同感を覚える
- 効果: 地域の住民は案内することにより震災のことを忘れない

## まとめ

- 大規模な震災を経験した地域は学ぶ観光の対象となる
- 学ぶ観光における役割は立地場所と、経験の強度に関連する
- 復興後も震災の教訓と経験を伝える方法: 地域の記念場所(モニュメント)と口頭伝達(語り部)
- 市民参加(ボランティア)による学ぶ観光に限界がある → 制度化された記憶(公共施設など)も重要である
- 震災観光: 市民同士の協力、コミュニティや復元力など、人道的側面に焦点が当てられている
- 復興過程の中に起こった対立や問題があまり紹介されない
- 公共機関に比べてNPOの体験学習は市民の自立と独立を重視している → 解釈の違い
- 本当の教育効果は、「不協和」を伝えることにあるのでは?